

4つの研究を通して見えてくる TEM の魅力

山崎優子

(立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構)

4つの報告は、インタビューで得られた発話データをそれぞれの観点から TEM に表しています。

番田報告では、就職活動を終えた方にインタビューを行い、就職活動の開始から終了に至る径路を TEM に表現されています。TEM には、自己対話がキャリア発達を促進する大きな要因であることが示されており、キャリア教育には自己を見つめさせることが必要だという指摘に説得力をもたらしています。

長坂報告では、性同一障害者のなかに Sex story, Gender story, Falsity story が存在することを示し、これら3つのストーリーの関わりやストーリーが変遷していく様子を TEM に表現されています。その結果、社会に適応したいという思いは、社会に受容されない語りを遠ざけ、真実とは異なる語りを生み出すことを示唆しています。Falsity story が語られる背景には今生きている社会に適応したいという思いが存在するという指摘は、共感できるものです。

和田報告と廣瀬報告では、それぞれひきこもりの問題をテーマとし、異なる切り口から TEM を描かれています。和田報告では、ひきこもりを抱える家族にあって、ひきこもりではないきょうだいが、思春期や青年期に家族から「自律」するまでの径路を示されています。一方、廣瀬報告では、ひきこもりから家族とのコミュニケーションが取り戻されるまでの過程について、示されています。これらの報告から、同じ「ひきこもり」問題であっても、その観点は多様であることをあらためて感じさせられます。

4つの報告を拝聴して感じたのは、TEM によって「語り」を視覚化することで、現象の理解を促進し、研究者の主張をより説得的なものにしているということです。以下、量的研究を行う者の目線から、TEM の魅力と可能性につ

いて感じたことを述べたいと思います。

魅力的な TEM の方法論

TEM の方法論は、量的研究にはみられないものです。量的研究においても発話データの分析はみられますが、分析の手法は、質的研究とは異なります。量的研究における発話分析の手法としては、例えばテキストマイニングがあります。テキストマイニングでは、発話データを品詞の単位に分解し、例えば、特定の名詞の出現数をカウントしたり、特定の単語と単語が共起する頻度をあらわしたりします。しかし、ある単語の出現頻度が高いからといって、それだけで、その人の語りを十分に理解することはできないでしょうし、その発話に至った経緯を前後の文脈と関係づけて捉えることができなければ、その人の語りを理解できたとはいえないでしょう。個々の発話として分断するのではなく、本来の連続的な語りとして捉えた上で系統立った深い分析を行いうところに、TEM の魅力があるのだと思います。

そしてもう1つ筆者が TEM の魅力を感じたのは、語り手と聞き手による語りの解釈の多様性を、より理解しやすいかたちで視覚化できるということです。経験した出来事の解釈が変わることは、誰もが日常の中で体験することでしょう。出来事を経験した時点では感じなかったとしても、角度をかえてみれば、あるいは時間をおいてみれば、その出来事の意味付けが変わってくる場合があります。例えば、その人の歴史において、それまで経験したその他多くの出来事とは一線を画する特別な出来事に遭遇した場合、これまでは気にもとめなかった出来事の意味合いが変わってくる場合があります。また、同じ経験をした場合であっても、その捉え方が一様とは限りません。その人が歩んできた人生はさまざまでしょうし、そうした経験は物事の捉え方にも影響を及ぼすでしょう。「語り」を可視化することでこうした解釈の変化をありありと捉えられるようになることは大変に魅力的です。

さらに TEM 図を描くにあたっては、出来事を聞き取る側の過去の経験、物事の捉え方の多様性が、語られた内容の解釈、捉え方を一層豊かでユニークなものにしてくれているように感じられました。実際、番田報告で描かれた TEM は、学生のキャリア支援にあたられたご経験があるからこそ可能だったと思いますし、長坂報告で描かれた TEM は、性同一性障害の研究を始めて10年というご経験があるからこそ可能だったと思います。同じ発話データを

与えられたとしても、そのような経験のない者にとって、報告者の先生方が描かれたような TEM を描くことは困難なことでしょう。どのような TEM が描かれるかは、研究者の立ち位置によって大きく影響を受けるといえそうです。多様な解釈が可能な語りに対して、特定の解釈がなされるのは、特定の解釈を生み出すその人独自の観点が存在するからであり、研究を行うにあたっては、経験を語る側、聞き取る側の立ち位置を明確にすることが重要であると感じました。

しかし、こうした TEM の性質は、研究に柔軟性をあたえるという点で魅力となる一方、研究者の主観が入り込む余地をどうとらえたらよいか、という問題も提起するように思われます。この問題について本ワークショップでも、フロアとの次のような議論がありました。研究する側の主観について、「分岐点 (BFP) というのは本人の課題から『これが転機になった』と自分で考えることを抽出していきました。調査者の主観はかなり入ってくると思います。主観が入る一方、現場をどうやって教育的に展開させていくかは、ある程度主観を交えながら感覚的にやっていかないといけない」と和田報告が指摘する一方で、他の報告からは、研究に主観的要素が入り込むことに消極的な見解も示されました。確かに質的な分析において主観を完全に排除することは困難かもしれませんが、その知見が得られた経緯を視覚的にたどることができれば、その主張が単なる「主観」なのか、発話データから導かれた「視点」なのかを区別して議論することもある程度可能になるのではないのでしょうか。TEM に描かれた分岐点 (BFP)、必須通過点 (OPP)、等至点 (EFP) がどのように設定されたのか、それを明確に示すことで、研究者が描く出来事の生起、出来事間の関係性を生み出した背景への理解が深まり、その結果として研究者の主張は他者の共感を得やすくなるのではと思います。

量的研究にとっての TEM

TEM 研究の目的が、現象についての多様な観点を導き出すことであるのに対して、量的研究の目的は、現象について的一般法則を導き出すことだとする指摘があります (荒川・安田・サトウ, 2012)。同一の現象について異なる次元からアプローチできるということは、その現象をより深く捉えることが可能になるという点で非常に意義のあることだと思います。例えば、教育における成績評価を考えてみると、テストの点数、偏差値だけでは、十分にその人の習

熟までの過程を捉えられない可能性があります。前学期と比べてテストの点数や偏差値が下がったとしても、その人の中では習熟度が高まっていたということもあり得るからです。点数や偏差値といった量的な変化に加えて、習熟が前期から後期にかけて推移する様を TEM で表すことができれば、習熟に影響する要因をより具体的に捉えることができるでしょう。

また、TEM はこれまでの質的研究にはあまりなかった「分析方法の枠組み」をもっているという点で、量的研究者（という括りが適切かはさておき）の関心を引きつけるとともに、質的研究への理解が深まることを促進するよう思っています。これまでの質的研究の方法論は必ずしも具体的な枠組みが用意されているわけではなく、研究者とテーマによってその手法は多様であり、誤解を恐れずにいえばマニュアルのない「職人技」のような側面が強かったように感じます。実際、初学者が「アカデミックな」質的研究を行うことのハードルは非常にかつたように思います。前述の「主観」の問題とも関連しますが、質的研究で得られた知見の妥当性をどのように判断すればよいのかといった声が量的研究者から聞かれることも少なくありませんでした。解釈の自由度が高すぎて、その解釈に至った背景が見えにくい、ということがあったのだと思います。しかし、TEM によって分析の枠組みが提供されることで、読者はその分析の過程をたどっていくことが可能になります。その結果、主張の妥当性を吟味することがある程度可能になり、方法論が異なる者同士であっても同じ土俵で議論できるようになることが期待されます。

TEM が導入されることで、質的データの分析に1つの枠組みが得られることは、質的研究、ひいては心理学研究における方法論の広がり大きく寄与するものと考えます。

TEM 研究の展望

TEM 研究の今後の課題として、出来事の解釈の複雑性について、どこまで捉えきれるかが挙げられると思います。例えば、ひきこもりの問題をきょうだいの観点から捉えるのか、親の観点から捉えるのかによって、その問題への対処の仕方が異なることが、和田報告と廣瀬報告から明らかにされました。今後、ひきこもり本人やひきこもりの経験を克服した人にインタビューができれば、ひきこもり問題に対する新たな視点が示され、新たな解決方法が見出せるかもしれません。また、本人に関係するさまざまな人たち（たとえば、本人を担当

した学校の先生や友達)のインタビューによって、問題の新たな側面が明らかにされるかもしれません。さまざまな観点、さまざまな切り口から、問題を捉えることによって、多様な TEM が描かれることでしょう。さらには、ひきこもり本人との関係性によって、描かれる TEM は異なってくるでしょうし、個々の TEM から、マクロレベルの TEM を描くことも可能かもしれません。

また、安田(2005, 2009)が指摘するように同じ立場の方たちから多くのデータを得ることで、TEM による分析の可能性をどう拡張できるかについて検討することも1つの課題かと思えます。大量のサンプルから、「経験の共通項を捉えたうえで、類型化を介在させ、個人の経験を時間経過における変化プロセスとして示す」(安田, 2005)こと、その逆に、「共通する経験としていったん一括りにして捉えた等至点(EFP)に内包する固有で多様な意味や、必須通過点(OPP)に結束化される文化社会的な諸力を読み解くことや、等至点(EFP)や必須通過点(OPP)や分岐点(BFP)を要衝とする経験のつらなりを提示すること」(安田, 2009)によって、個々の具体例を示すマイクロレベルの TEM と抽象的で一般的傾向を示すマクロレベルの TEM の両面から問題を捉えることが可能になると思えます。

TEM 研究には、大きな可能性が秘められているように感じました。

【引用文献】

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ. (2012). 複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例. 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- 安田裕子. (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程—治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. 質的心理学研究, 4, 201-226.
- 安田裕子. (2009). 不妊治療経験者の子どもを望む思いの変化プロセス—子どもをもつことができなかった女性の選択岐路から. サトウタツヤ(編), TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして. 誠信書房.